

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 戦 海燕

本論文はイギリスにおける喫茶習慣の文化・社会現象としての性格の変化を歴史的文脈として設定し、それが、主として19世紀末から1950年代までのイギリス小説において、どのように表象され、またそこにいかなる含意が潜んでいるかを分析することによって、文学伝統としての喫茶表象の変遷の記述を試みたものである。

著者は17世紀に茶道具とともにイギリスに紹介された喫茶習慣が、上流階級の間で「アフタヌーン・ティー」という様式として確立され、さらにその習慣が中・下層階にも「ハイ・ティー」として浸透していったプロセスを概観した上で、そのような変化が文学作品にどのように投影されているかを通時的に記述し、またテキストの精緻な読解を通して、さまざまな作品の喫茶場面がどのような含意を持っているかを明らかにする。著者によれば、17世紀後半からの王政復古期喜劇の喫茶表象において、すでに表面上の社交性を裏切る何らかの性的含意が見出され、これが18世紀、19世紀のイギリス小説における喫茶表象の源流となっている。それを端的に示すのが19から20世紀への世紀転換期に活躍したヘンリー・ジェームズの小説で、ここでは、社交の場の儀礼化された言説や身振りがいかに性的動機や利己的動機を隠しうるのかが、喫茶場面を利用することによって見事に浮き彫りにされている。こうした特徴は20世紀前半のリアリズム小説のみならず、実験的なモダニズム小説にも変奏を加えながら受け継がれ、喫茶行動は、本来持っていたはずの人間同士の融和を図る社交性の機能とは裏腹に、多くの場合、ジェンダーや階級意識をも背景とした個人間、グループ間の対立、葛藤を内包したものであるとして表象されている。著者は、19世紀末に出現した喫茶店が担った女性にとっての新たな職場という機能にも言及しつつ、1950年代に入るとこの喫茶表象はセクシュアリティや過去へのノスタルジアといった新たな要素を吸収しつつ、人間関係の細部を描く小説の確固たる伝統となっていることを跡づけている。

本論文は文学作品における喫茶表象に着目した点で高い独創性を有するが、さらに特筆すべきは、概観される夥しい作品が通時的広がりを持っていると同時に、難解をもって知られるジェームズをはじめ、主対象とするテキストに繊細かつ精緻な分析が施されていることで、文化研究と文学批評を見事に融合した点が高く評価される。

対象テキストによって批評の深度に多少のむらがあり、また序論部の中期ヴィクトリア朝の喫茶習慣については更なる研究の余地があるとも思われるが、本論文がイギリス小説研究における新たな領域を開拓した意義は極めて大きく、その先駆的業績としての価値を損なうものではない。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。